様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　6　月　1　日現在

機関番号：14301
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2010 年度～2011 年度
課題番号：22820034
研究課題名（和文）　プラバーカラ派による音声の永遠性論証の解明

研究課題名（英文）　On the proof for the eternality of sound by Prabhakara school

研究代表者 志田泰盛
（Taisei SHIDA）
京都大学・次世代研究者育成センター・助教
研究者番号：60587591

研究成果の概要（和文）：音声とは我々の日常的な伝達の媒体であり、また、聖典を構成する基本的要素であるが、その音声が一体永遠なのか否かをめぐる問題は、古典インドの哲学における一大論争点を形成している。例えば、音声に限らず一切存在の刹那性を説く仏教の刹那滅論や、聖典を神の著作とみなすニャーヤ学派の神学論など、各学派の根幹的教義と相容れないため、この〈音声の永遠性問題〉という教説をめぐっては多くの学派が論争にコミットした。本研究では音声の永遠性を主張する聖典解釈学派の中から、プラバーカラ派の議論の分析を主な目的とした。このについて、特に同学派の別分派であるバッタ派の論証と比較することで 2 つの学派間の論証の差異に焦点を当てて分析を進めた。具体的には、シャーリカナータの著作『プラカラナパンチカー』第 9 章における音声の永遠性論証の箇所を取り上げた。方法論としては、まずは刊本の十分な読解を前提とした上で、関連する思想家との影響関係を網羅的に分析するために、周辺年代の関連資料をデジタル化して検索の速度と精度の向上を図った。また、一方で将来的に原典写本による再校訂を見込んで入手済みの原典写本の校合を進めつつ、インドの各写本図書館において関連文献の写本調査するというように、テキストの電子化、入手済み写本の校合、新写本の調査を 3 本の柱とした。すでに入手済みであったネパール将来の写本に加えて、聖典解釈学関係の写本を多く保管している南インドの図書館を調査することでマラヤラム文字写本・テルグ文字写本など新写本のデジタルデータの蒐集も行った。その成果の一部は平成 23 年 7 月の西日本インド学仏教学会（広島大学）、平成 24 年 1 月の第 15 回国際サンスクリット学会（インド・デリー）などで口頭発表し、『多田孝文先生古稀記念論文集』へも投稿した（近日刊行予定）。

研究成果の概要（英文）：The topic of whether sound is eternal or not is one of the biggest controversies in the classical Indian philosophy. Mīmāṃsā school claims the eternality of sound, which formulates the sacred scriptures and also is the media of our verbal communication. But this assertion is objected by many schools such as Buddhist or Nyāya. For, the eternality of sound is contradictory to other schools' basic doctrine such as the theory of momentariness asserted by Buddhism or the Nyāya theology which regards the Vedic scripture as the composition of an omniscient god. There are two major Mīmāṃsā schools, that are Bhāṭṭa and Prabhākara. These two schools are mutually rivals on some philosophical polemics, but regarding the proof of the eternality of sound, previous studies does not pay so much attention on the difference of these two schools how to prove the eternality of sound. In this research, I analyze the way how the Prabhākara school proves it, comparing with the proof by Bhāṭṭa school. This research was proceeded mainly through the following method: computerization of material, collation of the source texts, and further research for the new manuscripts. As a result, I clarified the argument of Śālikanātha in the ninth chapter of the *Prakaraṇapañcikā*, where he proves the eternality of sound.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
22 年度	1,190,000	357,000	1,547,000
23 年度	1,050,000	315,000	1,365,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,240,000	672,000	2,912,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：印度哲学・仏教学
キーワード：聖典解釈学派、音声の永遠性、プラバーカラ派、プラカラナパンチカー、リジュヴィマラー

１．研究開始当初の背景

古典インドの正統バラモン系を代表する聖典解釈学派は、ヴェーダ本位主義とも言える独自の哲学体系を持つ。特に、ヴェーダの権威論証に関連して提唱する 2 つの学説、すなわち〈真理の自律説〉と〈ヴェーダの非人為性〉は聖典解釈学派に特有の護教論の中核を形成している。

さらに〈ヴェーダの非人為性〉に関連して、聖典解釈学派はより一般的に〈音声の永遠性〉へとその学説を敷衍しており、この教義をめぐっては、仏教系学派を含むインド哲学諸派との間に膨大な論争の跡を残している。というのも、音声の永遠性は、一切の存在の刹那性を説く仏教学説や、あるいはヴェーダの権威を仰ぐバラモン系学派でもヴェーダを神の啓示とみなすニヤーヤの神学理論等と真っ向から対立するからである。以上のように、〈音声の永遠性論証〉はインド哲学諸派の間の論争の一大交錯点となっているため、7－10 世紀の聖典解釈学派の二大派閥による〈音声の永遠性論証〉の解明は「史書のない」インド思想史を構築する上での基礎資料として極めて重要度は高い。

この説の起源をめぐってはフラウワルナー博士が 1961 年の論文で大胆な仮説を提起した。すなわち、聖典解釈教学の根本経典『ジャイミニ・スートラ』の中における音声の永遠性論題（JS1.1.6–23）は、経典編纂段階の中でも後代の挿入であり、この教説自体は文法学派より継承しつつも、ヴァイシェーシカ学派のカテゴリー論により修正が施された、というものである。この仮説をめぐっては、多くの研究者が疑義を呈しつつも、文献学的資料が限定的であることから、未だに検証が俟たれている。

しかし、フラウワルナーの仮説提示以降、資料的な進展が全くなかったわけではない。2007 年に出版された片岡啓博士による『シャバラ註』（根本経典に対する 1 次註）の校訂研究は、従来の根本経典の読みにも訂正を施すものであり、また、今まで使用されることのなかった南インド系の写本に基づく点で、根本経典時代、そして 1 次註の時代に固定されていたであろうテキストの形をより実証的に再構成したものである。

そして本研究が主題とするプラバーカラ派とバッタ派への分裂はこの『シャバラ註』への注釈の段階になって起こる。すなわち『シャバラ註』に対する注釈として、クマーリラバッタによる『シュローカ・ヴァールッティカ』とプラバーカラミシュラによる『ブリハティー』とがそれぞれ、バッタ派とプラバーカラ派に分かれた後の最初の文献となり、両学派ともさらに註釈を重ねていきながら、それぞれ独自の教学体系を充実させていった。

この一連の注釈群のうちプラバーカラ学派のものは一通り校訂出版されているが、思想研究はまだ十分とはいえず、特にプラバーカラ学派による音声の永遠性論証に焦点を当てた先行研究は確認されていない。さらに、該当箇所をカヴァーしつつも先行校訂本に使用されていなかった写本も発見されており、それらの原典資料を校合に基づいた再校訂も俟たれている状況にあるといえる。

２．研究の目的

本研究が主眼とするのは、聖典解釈学派の一派であるプラバーカラ派による〈音声の永遠性論証〉の文献実証的解明である。バッタ派とプラバーカラ派という聖典解釈学派の二大派閥のうち、前者のバッタ派における〈音声の永遠性論証〉の研究に関しては、京都大学白眉センター（旧次世代研究者育成センター）のプロジェクトとして研究代表者自身が継続中である。それに対して本研究課題においては、プラバーカラ派の〈音声の永遠性論証〉に焦点を当てたもので、バッタ派の研究との相互補完が期待される。

プラバーカラ派とバッタ派は教学上の多くの点で対立している。音声理論をめぐっては、後代、すなわち遅くとも 13 世紀以降の文献において、プラバーカラ派が音声を虚空

の属性とみなす一方、バッタ派は音声を実体視するという大きな見解の相違が確認されている。古くは『シャバラ註』という注釈対象を共有しながらも、約 1000 年を経て、このような教学上の分裂が起こった背景については未だ謎に包まれているが、『シャバラ註』以降の諸註釈の資料については、校訂出版の有無を問わなければ、原典資料自体の存在は確認されている、その間の両学派の一連の文献を比較的に分析することで、上記の教学的分裂の起源を解明することが見込まれる。さらには〈音声の永遠性論証〉というより大きなテーゼに関しても、両学派の議論を比較対照することができる。

そして、上記の検討を踏まえた上で、将来的にはフラウワルナーにより仮説が与えられたより古い時代のミーマーンサー思想の淵源の分析に対する基盤を築くことが目標となる。

３．研究の方法

本研究の遂行にあたり、大きく(A)テキストと写本の電子化、(B)写本の校合及び翻訳と訳註の作成、(C)原典写本保存機関の調査、という 3 つの方向からアプローチする。

(A)については、対象とするテキストを電子テキスト化し、また、マイクロフィルムの状態の写本の画像を電子化することで、テキスト研究の精度と効率の向上を図る。

(B)の中でも、文献研究の土台となる原典写本の校合作業は、他に優先する必要があるため、特に初年度に重点的に進めた。具体的にはネパール・ジャーマン写本カタログ化プロジェクト（NGMCP）由来のナーガリー文字写本を入手済みであったが、本研究課題の写本調査の中で入手できた写本の中からケーララ大学東洋研究所所蔵の写本のマラヤラム文字写本（No. 19684)、そして、川尻洋平博士より譲り受けたチャンディーガルの DAV カレッジ所蔵のナーガリー文字写本を校合に使用した。

(C)の写本調査に関しては、インド各都市の写本図書館を訪問し、聖典解釈学派の作品に限らず広く調査した上で、関連写本の蒐集を試みた。本研究課題として調査した写本所蔵機関は、マイソールの東洋学研究所（Oriental Research Library)、トリヴァンドラムのケーララ大学東洋学研究所写本図書館、チェンナイの神智教会（Theosophical Society）内アディアル図書館、ジャイサルメールのジャイナギャーナバンダーラ、アーメダバードのＬＤ研究所である。

４．研究成果

まず、(A)資料の電子化のうちテキストの電子化については、シャーリカナータの著作『リジュヴィマラー（*Ṛjuvimalā*)』の関連個所（タルカパーダの一部）を謝金事業として電子化した。この作品は、プラバーカラ派のシャーリカナータによる『ブリハティー』への注釈であり、『ジャイミニスートラ』に対する 3 次註・『シャバラ註』に対する複註に相当する。この電子化により、すでに電子化され公開されているシャーリカナータの独立作品『プラカラナ・パンチカー』との対応等についても、精度の高い分析を可能にした。

また、既に入手済のマイクロフィルムの資料を重要度に応じて順次デジタル画像へ変換した。具体的には、オックスフォード大学ボードリアン図書館所蔵の『シュローカヴァールッティカ』(No. 520A, Wilson 325）などをデジタル化することで関連資料への参照の効率化を図った。

(B)原典の校合については、シャーリカナータの『プラカラナ・パンチカー』の中、音声の永遠性を主題とする第 9 章について、マラヤラム文字写本を含む 2 刊本 3 写本を校合し、読解分析を行った。この章については、京都大学文学部における 2011 年度前期担当の授業の中で京都大学の学生諸氏と読解を進めることができた。授業期間中に章の終わりまでは読み進めることはできなかったが、後半の「音声の再認識」の問題を除き、難解な同章についてほぼクリアにすることができた。

また、(C)原典写本の調査については、マイソール、トリヴァンドラム、チェンナイ、ジャイサルメール、アーメダーバードといった各都市の図書館を調査し、聖典解釈学派・仏教論理認識論学派などの哲学文献の写本を入手した。特にプラカラナパンチカーについては、上記の校訂で使用した諸写本の他に、トリヴァンドラムからはマラヤラム文字写本を 5 本（No. L166, 1387, 19707, 18303, 18148）の撮影を委託し、また、マイソールではテルグ文字写本 1 本の撮影に成功した。マラヤラム文字写本については、近い将来に残りの 4 本も校合が見込まれる。テルグ文字に関しては、その正確な解読のために、おそらくは現地の専門家の協力が必要であるので、この解読と校合に関しては今後新たなプロジェクトの中で進める必要があるだろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

Taisei SHIDA "Hypothesis-Generating Logic in Udayana's Rational Theology," *Journal of Indian Philosophy* vol.39, pp. 503 － 520, 2011. (DOI: 10.1007/s10781-011-9144-x)

志賀　浄邦・志田　泰盛「*Yuktidīpikā*

87,18–89,17（ad SK 6ab）和訳と注解」,『インド学チベット学研究』vol.15, pp. 1－34, 2011.

〔学会発表〕（計 6 件）
志田泰盛「古典文献学としてのインド哲学」第 9 回白眉セミナー, 京都大学白眉センター, 2010 年 10 月 5 日.
Taisei SHIDA "Philology as a window on the history of thought: The study of ancient India in Japan and its origin in modern Europe," Kultur- und Wissenstransfer Japan-Europa, Universität Würzburg, 18th May 2011.
志田泰盛「古典インドにおける音声の永遠性論証とその背景」白眉センター研究合宿，京都大学瀬戸臨海実験所，2011 年 5 月 26 日.
志田泰盛「聴覚の内送・外送をめぐる問題」西日本インド学仏教学会，広島大学，2011 年 7 月 30 日.
Taisei SHIDA "Some editorial notes of the Sucaritamiśra's commentary on the *śabdādhikaraṇa*/*śabdanityatādhikaraṇa* section of the *Ślokavārttika*," 15th World Sanskrit Conference, Delhi: Vigyan Bhavan, 8th Jan 2012.
志田泰盛「古典インド哲学における聴覚の外送・内送をめぐる問題―ミーマーンサー学派によるサーンキヤ説批判―」拡大プラジュニャーカラグプタ研究会，東京学芸大学，2012 年 3 月 25 日.

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者 志田泰盛
(Taisei SHIDA)
研究者番号：60587091
京都大学・次世代研究者育成センター・助教

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：